

上智大学英文学会

第39回大会プログラム

と き 平成26年10月25日（土）

ところ 上智大学7号館14階特別会議室

I 1:30 総会

開会の辞

会長・上智大学教授 永富 友海

活動報告・会計報告

事務局

II 研究発表

1:40 「『ジュリアス・シーザー』におけるbe動詞に関する一考察

—“Such men as he be never at heart's ease” (1.2.207) の be は叙実法か？」

上智大学英文学科3年 黒須 祐貴

司会 東洋大学講師 古田 直肇

2:20 「『タイタス・アンドロニカス』における復讐とその背景」

上智大学大学院博士前期課程2年 深堀 いずみ

司会 上智大学言語教育研究センター講師 田村 真弓

3:00 「C. S. ルイスの作品における死の扱い

—『ナルニア国物語』を中心に」

上智大学大学院博士前期課程2年 磯西 翔子

司会 東京海洋大学准教授 日臺 晴子

III 3:50 シンポジウム

「ホーゾーンの短編小説における科学・技術・芸術」

司会 佐野陽子（上智大学言語教育研究センター非常勤講師）

発表者 奥山誉瀬（上智大学英文学科3年）

川上 晃（上智大学英文学科3年）

杉崎存紗（上智大学英文学科2年）

高井彰則（上智大学英文学科2年）

V 5:40 閉会の辞

大会準備委員・上智大学英文学科教授 舟川 一彦

VI 6:00 懇親会

上智大学紀尾井坂会議室4

会費：4,000円（大学院生・学部生は2,000円）

〈研究発表〉

『ジュリアス・シーザー』における be 動詞に関する一考察 —“Such men as he be never at heart’s ease” (1.2.207) の be は叙実法か？

英文学科 3 年 黒須 祐貴

『ジュリアス・シーザー』1 幕 2 場、ルペルカリア祭の儀式の後で、シーザーがキャシアスの振る舞いについて話している場面に次のような一文がある。“Such men as he be never at heart’s ease” (1.2.207) この文を読んで気づくのは、主語が複数であるのに be 動詞が are ではなく不定形になっているということである。シェイクスピアの時代には、現代に比べて、まだ叙想法が広く使われていた。ただ、この箇所については、主節中の叙想法である可能性を疑ってみるものの、願望や祈願あるいは勧誘を表してはいないように思われる。

注釈はどうなっているだろうか。代表的定本とされる The Arden Shakespeare、The New Cambridge Shakespeare、The Oxford Shakespeare では、いずれの版もこの問題の be に関する注釈はない。その一方で、国内の注釈書に目を移してみると、be = are、この be は叙実法であるという注釈が付されている。大方はこの程度の注釈であるが、『英文法汎論』の著者である細江逸記の注釈書には、上述の注記に加えて、この be は古英語における beon の「遺形」だと、細江らしく歴史的な視点から記されている。

このように、当該の be を叙実法として考える説が有力ではあるが、日本で出版された注釈書のあらかたに、叙想法ではなく叙実法であるとの注釈が付されているという事実を裏から考えてみると、この be には何か叙想法めいたものが潜んでいるのではないだろうか。発表者は、注釈にこそ叙実法であると書かれていても、どうにも納得がいかず、この be が果たして叙実法なのか、それとも叙想法なのかを決めかねた。本発表では、細江の施した注釈を足場として、共時的な立場にとどまるのではなく、通時的・歴史的な立場から光をあてることにより、叙想法めいたものの根源を探る。そのプロセスとして、第一に、共時的な観点から、シェイクスピアの英語、すなわちエリザベス時代の英語から、問題の be が叙実法と叙想法のどちらで使われているのかをあらためて検証する。第二に、通時的な観点から、古英語における be 動詞 wesan と beon の語法を援用して、この be に内潜する性質を明らかにする。

『タイタス・アンドロニカス』における復讐とその背景

大学院博士前期課程 2 年 深堀 いずみ

ウィリアム・シェイクスピア(William Shakespeare, 1564–1616)の『タイタス・アンドロニカス』(Titus Andronicus, 1594)は、シェイクスピア最初の悲劇であると同時に、血を血で洗う最も残酷な復讐劇である。本作品は批評家から賛否両論を呼んできた。内容があまりにも残酷であること、そして登場人物たちが時として場面にそぐわないほど仰々しく韻文で語ることから、詩の技術はあっても駆け出しの劇作家が書いた未熟な作品であると考えられてきた。

これまで、16 世紀当時に流血悲劇が流行したこと、それらとの類似性が着目されてきた。しかしながら、本発表では『タイタス』でもう一つの特徴である、ラテン語による古典作品と

それに対する登場人物たちの復讐に出る行動について扱うこととする。

本作品は、オウィディウス(Ovid, 43-17 BC)の『変身物語』(*Metamorphoses*, AD 8)を主な材源としている。ゴート族との争いに勝利したローマの軍人タイタスは、戦いの代償としてゴート族の女王タモーラ(Tamora)の長男の命を奪う。タモーラは復讐として、残った息子たちにタイタスの娘ラヴィニア(Lavinia)に暴行を働かせる。彼らは犯行が明らかにされぬよう、彼女の手と舌を切り取る。伝達手段を奪われたラヴィニアだが、タイタスらの助けを借り、棒を口にくわえて地面に文字を書くことで真相を明らかにする。このような劇の筋と核心部分では、フィロメラ(Philomel)とプロクネ(Procne)の物語が用いられている。そして、その核心部分に『変身物語』が読まれるのだが、本そのものが作中に出てくるのはシェイクスピア作品では極めて珍しいことである。

本作品でラテン文学が登場する意図は、研究の余地があると考えられる。作品中に見られる古典文学の背景と、登場人物たちの言動を分析することで、古典作品を読むという行為と、相手に復讐するという行為の関係について考察し新たな解釈を見いだしたい。

C. S. ルイスの作品における死の扱い—『ナルニア国物語』を中心に

大学院博士前期課程 2年 磯西 翔子

C. S. ルイス (C. S. Lewis, 1898-1963) の代表作『ナルニア国物語』(*The Chronicle of Narnia*, 1950-56) は聖書物語を題材にナルニアの創造から滅亡までを描いた7巻から成る年代記であり、その最終巻『最後の戦い』(*The Last Battle*, 1956) は、ナルニアの終焉とアスランによる最後の審判、そしてこれまでのすべての物語で登場してきた子どもたちの死によって幕を閉じる。列車事故に巻き込まれた彼らは、天国へと導かれ永遠の幸せを得るのである。

主要人物が神の国に到達するところで終わりを迎えるという構図は、しかし『ナルニア国物語』に限ったことではない。ルイスは児童文学以外にも様々なジャンルを手掛けているが、例えば1938年から45年にかけて発表されたSF三部作では、主人公ランサムが楽園を想起させる美しい星、ペレランドラへ旅立つことが最後の作品『かのいまわしき紫』(*That Hideous Strength*, 1945)において示唆されているし、ルイスが最も気に入っていたという小説、『顔を持つまで』(*Till We Have Faces*, 1956)においても、書き手オリュアルが物語の最後に神の国へ行く幻を見る。更に彼の代表的な宗教書『悪魔の手紙』(*The Screwtape Letters*, 1942)も、ワームテッドという悪魔の誘惑対象であった人間が天国へと向かうことで終わりを迎えている。これらの作品に共通しているのは、死は神の国に至るために不可欠な道筋であるという発想と、永遠の喜びに満ちあふれた死後の世界への強い憧れである。

しかしこれらの作品では、主要人物が死ぬ瞬間は描出されない。神との対面や天国の自然あふれる甘美な世界の描写によって、死は暗示されるに留まるのだ。その一方で『ナルニア国物語』には、死が明確に描き込まれている。この作品では、死んでいく子どもたち本人の眼に映った列車事故の瞬間、すなわち彼らの死の瞬間の体験が描かれるのみならず、キリストを象徴するライオン、アスランの口からもその死が言明される。そこには死についての曖昧さは一切なく、子どもたちは自らの死をはっきりと自覚する。『ナルニア国物語』が児童文学であることを考えるとき、ルイスの作品におけるこうした死の描出の有無は、興味深い問題を提示してくれるように思われる。本発表では『ナルニア国物語』を中心に、ルイスの諸作品を死の扱い方という観点から考察してみたい。

〈シンポジウム〉

「ホーソーンの短編小説における科学・技術・芸術」

司会 佐野陽子（上智大学言語教育研究センター非常勤講師）

発表者 奥山誉瀬（上智大学英文学科3年）

川上 晃（上智大学英文学科3年）

杉崎存紗（上智大学英文学科2年）

高井彰則（上智大学英文学科2年）

今回のシンポジウムでは、「痣」と「美の芸術家」の二篇を中心に、ホーソーンが作品の中で科学・技術と芸術の相克をどのように描いているかを、様々な角度から論じます。（佐野陽子）

「痣」と「美の芸術家」における芸術家像からみるホーソーンの「原罪」意識

本発表では、「痣」（“The Birthmark”）と「美の芸術家」（“The Artist of the Beautiful”）の二篇を取りあげ、各作品に共通して登場する「芸術家」の姿の比較を通じて、そこから透視的に見ることができる科学と宗教の概念的対立を巡る問題の考察を試みる。また、その考察を踏まえた上で、ホーソーンが一貫して扱ってきた根源的な主題である「原罪」に関する作家自身の立場を改めて検討してみたい。（奥山誉瀬）

芸術家の成長物語として見る“The Artist of the Beautiful”

「美の芸術家」（“The Artist of the Beautiful”）は、若き芸術家と周囲からの無理解を描いた悲劇的な作品であるという見方が強いが、同時に主人公オーウェン・ウォーランドが理想の芸術家像に近づいてゆく成長物語という一面も併せ持っている。社会との軋轢の中で、オーウェンは苦しみながらも理想の芸術家像に近づいていく。作者自身の体験とも重なる表現や、ホーソーン作品の特徴とも言える *allegory* などに注目しつつ、本作品を読み解く。（川上晃）

「痣」を読み解く錬金術

本発表では、「痣」で重要な意味を担う錬金術という擬似学問について理解を深めながら、この作品に秘められたメッセージを読み解くことを試みる。「錬金術」というワードは誰でも聞いたことはあるものの、術そのものを本当に理解している読者は少ないことだろう。この興味深い「術」を理解した上で、本作品がいかに錬金術的要素にあふれたものであるかを実感することによって、ホーソーンから新たなメッセージを受け取ることができるはずである。（杉崎存紗）

“The Birthmark”におけるエイルマーの邪悪性

“The Birthmark”の登場人物ジョージアナは夫である科学者エイルマーの実験により命を落とすが、それはエイルマーが悪魔的存在だからであると推論する。このことを、19世紀アメリカにおける女性と男性の典型的理想像、エイルマーのアイデンティティでもある科学（錬金術）や科学者（錬金術師）に関するホーソーンの描写、ホーソーンの作品の特性、そして現代における科学に対する認識という観点から証明したい。（高井彰則）